

## 第5章 昭和62年度山口大学構内の立会調査

### 第1節 吉田構内の立会調査

#### 1 教養部複合棟新営に伴う立会調査

調査地区 吉田構内 1・J-16

調査期間 昭和62年9月8日（A地点）、昭和63年2月24日（B地点）、3月12・17日（C地点）

調査方法 工事施工時における立会調査

調査面積 約30m<sup>2</sup>

調査結果 A地点は樹木移植に伴うもので、工事基底面の現地表下約30cmまで構内造成に伴う埋め土が堆積し、顕著な遺構・遺物は認められなかった。B地点は給水管理設に伴うもので、工事基底面の現地表下約80cmまで構内造成に伴う埋め土が堆積していた。工事に支障のない範囲内で部分的に深掘りを行った結果、埋め土はさらに14cmほどの厚さを持ち、その直下に緑灰色礫混じり粘質土の地山が検出されたが、顕著な遺構・遺物は認められなかった。C地点は排水桝および側溝の新営に伴うもので、前者は現地表下約1.1mまで掘削した。現地表から厚さ約45cmの埋め土を除去した段階で、幅約30cm、深さ約9cmの溝状遺構を検出した。周辺は大きく攪乱を受けており、一部分しか残存していない。埋土は二層に分層され、上層は黒褐色粘質土（Hue 5 YR 2/1）、下層は黒褐色砂（Hue 2.5Y 5/3）である。出土遺物はなく時期は明かでない。後者は排水桝新営地点のすぐ南に位置するが、埋め土はわずか約14cmの厚さで、その直下が青灰色粘土の地山である。顕著な遺構・遺物は認められなかった。いずれも埋め土中に赤黒色粘質土（Hue 2.5YR 2/1）の遺物包含層がブロックで混入しており、土師器が出土した。耕作土が残存していないこと、遺構の遺存状況が極めて悪いことなどから、当該地域周辺での削平が比較的大規模に行われたことを窺わせる。

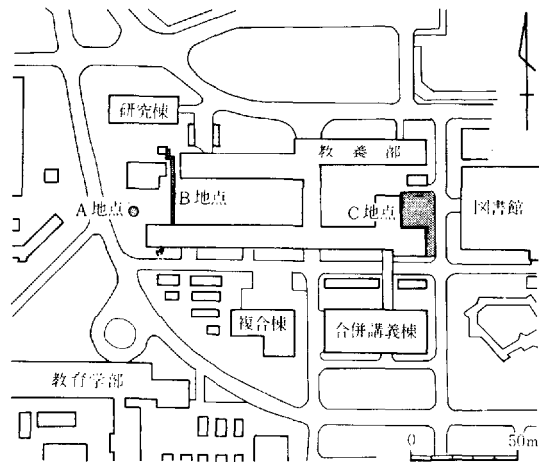


Fig. 52 調査区位置図

## 2 国際交流会館新営に伴う立会調査

調査地区 吉田構内 M-23, N-22・23

調査期間 昭和62年11月9～11日 (A地点)、昭和63年3月28日 (B地点)

調査方法 工事施工時における立会調査

調査面積 A地点-150m<sup>2</sup> B地点-約45m<sup>2</sup>

調査結果 A地点は国際交流会館の基礎工事に伴い、基礎部分を除いた地域が現地表下約1.2mまで掘削された。同建物敷地では昭和61年度に試掘調査を実施しており、南半部<sup>1)</sup>で東から西へ走行する弥生時代から古墳時代の河川跡が検出されている。幅約19m以上の規模をもつが、左岸付近は未検出であったため立会調査を行った。現地表下約40～80cmの構内造成に伴う埋め土の下は、厚さ20～50cmの第2層：暗オリーブ色ないしは黄灰褐色土が堆積しており、東に向かうに連れて層厚を増す。北東部では認められない。その下が河川跡の堆積土で、第3層：青灰色および緑灰色の砂礫が厚さ40～50cmにわたって堆積している。調査区内では左岸からの落ち込みは検出されなかったが、B地点の調査結果から幅30m以上の規模をもち、学外に広がるものと推測される。前回の調査では弥生土器、須恵器が出土しているが、今回は出土遺物はない。

B地点はA地点の南東約10mに位置し、浄化槽の新営に伴い調査した。堆積層順、層厚

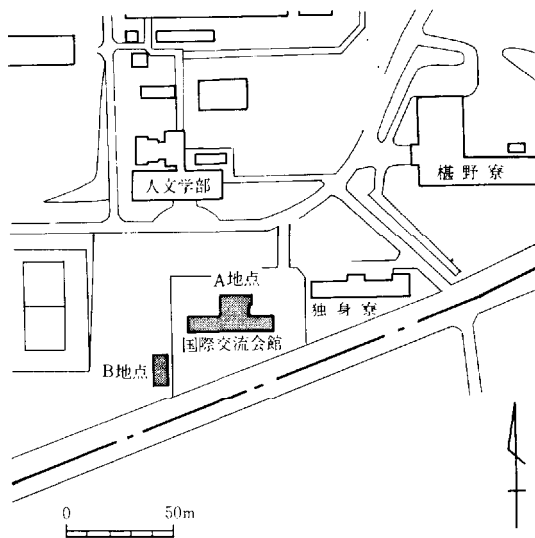


Fig. 53 調査区位置図

はA地点とほぼ同様であるが、第2層は認められない。河川跡は全面で検出されたが、層厚は20～40cmと薄い。なお、河川跡の埋積土の下位には、層厚約60cmの無遺物層をはさんで、上位から青灰色、黄褐色の砂礫がそれぞれ約60～70cm、30～40cmの厚さで堆積している。青灰色砂礫で湧水する。出土遺物はないが、弥生時代以前の河川跡の可能性はある。

[注]

1) 山口大学埋蔵文化財資料館「吉田構内国際交流会館新営に伴う試掘調査」(『山口大学構内遺跡調査研究年報VI』、1987年)。

### 3 教育学部附属養護学校自転車置場移設に伴う立会調査

調査地区 吉田構内 B-21

調査期間 昭和62年11月20日

調査方法 工事施工時における立会調査

調査面積 約1m<sup>2</sup>

調査結果 養護学校の敷地は施設整備の前段階で、昭和54年度に山口県および山口市教育委員会によって試掘調査が実施されている。体育館以北の約2300m<sup>2</sup>の範囲には、平安時代から室町時代の掘立柱建物跡（棟数不明）のほか柱穴多数が検出されている。また、体育館のすぐ北側では、東西に走行する弥生時代から古墳時代の溝2条が検出されており、そのうちの1条は幅約4mの大規模なもので、約50mの流路長が確認されている。さらに、敷地の北端部での側溝工事に伴う調査では、弥生時代前期から古墳時代前期にかけての多数の溝が検出されており、東・西両端部付近でも弥生時代から平安時代の遺物包含層の存在が報告されていることから、養護学校の敷地は遺構・遺物の遺存状態が比較的に良好な地域とされている。

今回の調査地点は、遺構が密に分布する体育館のすぐ北側に位置する。過去の調査では、施設整備前の水田耕作土上面から20～30cm下位で遺構面が検出されている。自転車置場の基礎は現地表面から40cmの掘削を必要とするものであり、工事による遺構への影響が危ぶまれたため立会調査を行った。しかし、基礎に並行して既設の排水管が埋設されており、調査範囲内は埋設管の工事によってすでに攪乱を受けていた。なお、埋め土には黒褐色粘質土がブロック状に混入しており、周辺での遺構ないしは遺物包含層の削平が行われていることを示唆する。

養護学校敷地内での調査は、これまでほとんどなされていないのが現状で、今後の調査によって集落構造、展開過程を明らかにする必要がある。

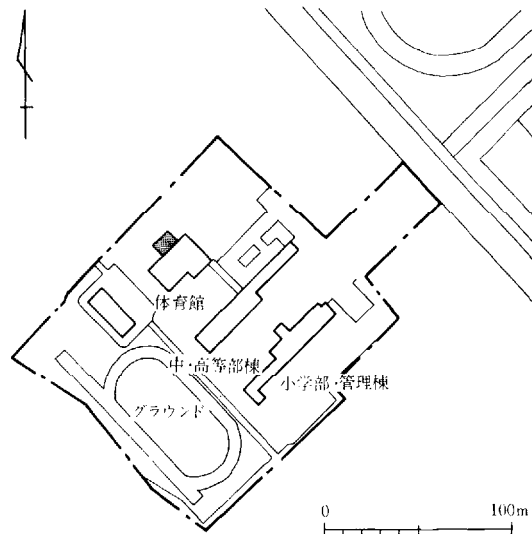


Fig. 54 調査区位置図

#### 4 農学部附属農場 E 7 圃場排水管理設および E 6 圃場進入路拡幅に伴う立会調査

調査地区 吉田構内 L・N-12

調査期間 昭和62年12月14日、昭和63年3月7～9日

調査方法 工事施工時における立会調査

調査面積 A地点—約21m<sup>2</sup> B地点—約34m<sup>2</sup>

調査結果 排水管の埋設工事は幅70cm、長さ約30mの規模で、現地表面から約60cm掘削するものである（A地点）。厚さ約20～30cmの耕作土の下には、上位から層厚約10～20cmの第2層：暗褐色粘質土（Hue 10YR 3/3）、約10～30cmの第3層：黒褐色粘質土（Hue 7.5YR 3/2）、約10cmの第4層：黒褐色粘土（Hue 10 YR 2/2）、約10cmの第5層：褐色粘質土（Hue 7.5YR 4/6）が堆積する（Fig. 56, PL. 32(1)）。遺物は第2層から弥生土器、歴史時代の土師器、第5層から弥生土器、須恵器、歴史時代の土師器、輸入陶磁器などが出土したが、いずれも小片で、大学会館敷地で検出した包含層と同一のものである<sup>1)</sup>。なお、中央部付近では地山が認められ、柱穴を検出した。

B地点は農作業用機械の搬入道路を確保するため、循環道路より一段高い飼料園を幅約2m、長さ約17mにわたって現地表面から約1.5m掘削するもので、調査地点の東に存

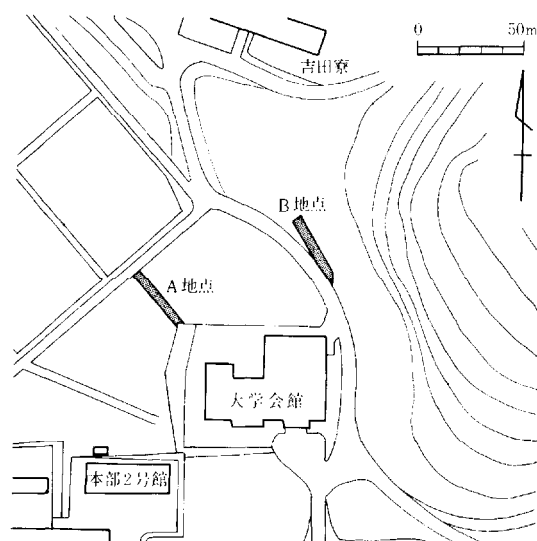


Fig. 55 調査区位置図

在する丘陵の裾部に位置する。堆積層順は厚さ約5cmの腐植土の下位に、周辺の丘陵を削平した客土が厚さ約10cm堆積する。その下には、層厚約10cmの褐色土（Hue 10YR 4/4）が堆積しているが、遺物は包含していない。地山はその下位に堆積する丘陵の基盤である明黄褐色（Hue 10 YR 6/8）の山土で、土壇1基が検出された。

土壇（Fig. 57, PL. 32(2)）

後世の削平によって東端部しか残存していない。平面形態は円形もしくは楕円形と思われ、現存最大長は東西42cm、南北66cm

吉田構内の立会調査

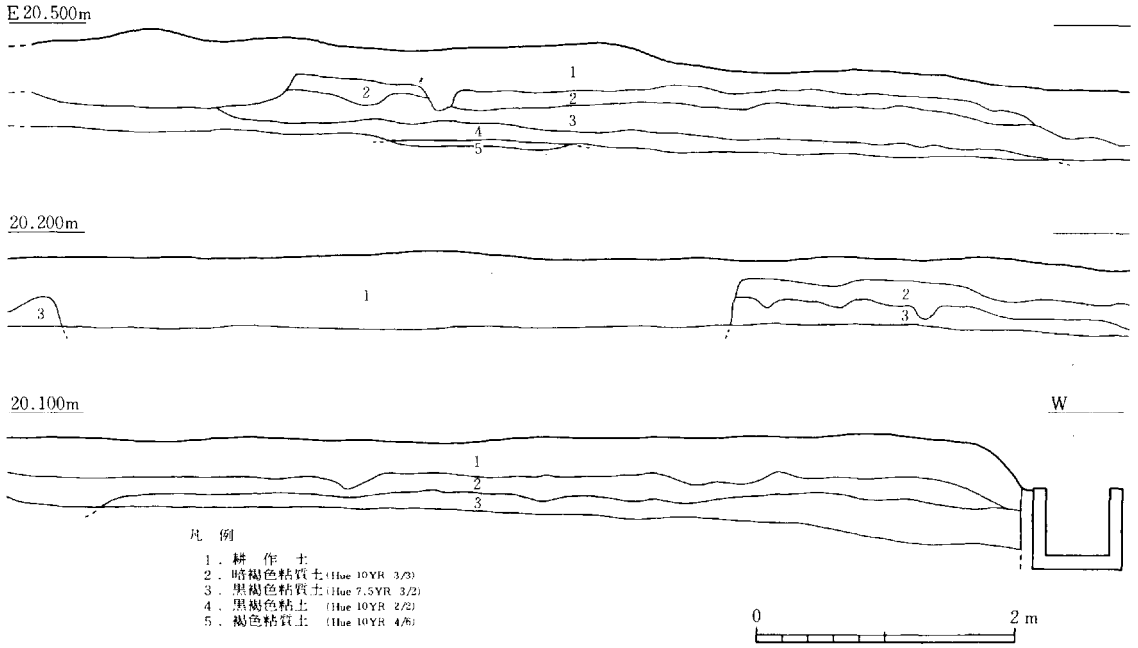


Fig. 56 A地点土層断面図

の規模をもち、深さは検出面から36cmである。検出面の標高は約22.0m。壁面は平坦な壙底から比較的緩やかに立ち上がる。埋積土は木炭を含む褐色土 (Hue 10 YR 4/6) で、地山の土が所々に混在する。埋積土の最上層には扁平な板石が一枚が認められる。

出土遺物はないが、埋積土の色調から古代から中世のものと考えられる。遺存状態が極めて悪く、土壙の性格を知る手掛りは少ないが、平面形態、規模、立地から土壙墓もしくは火葬墓の可能性が考えられたため、土壙を各一試料採取し、全リン酸 ( $P_2O_5$ )、全カルシウム (CaO) 量の分析を山口県農業試験場に依頼した。1mmのふるいを通した土壙について、全リン酸はバ

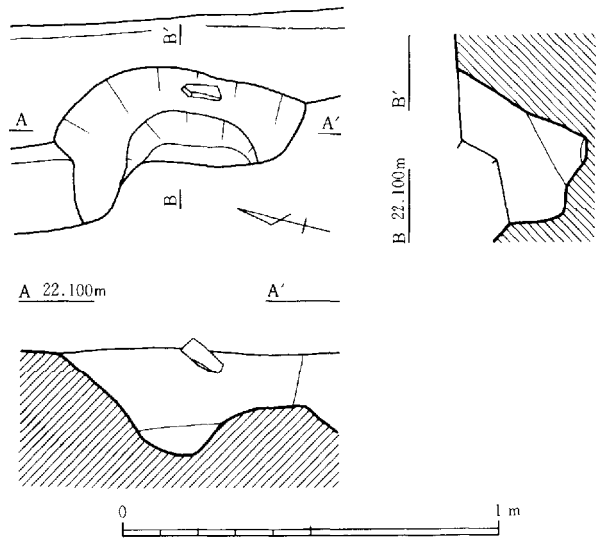


Fig. 57 B地点土壙実測図

昭和62年度山口大学構内の立会調査

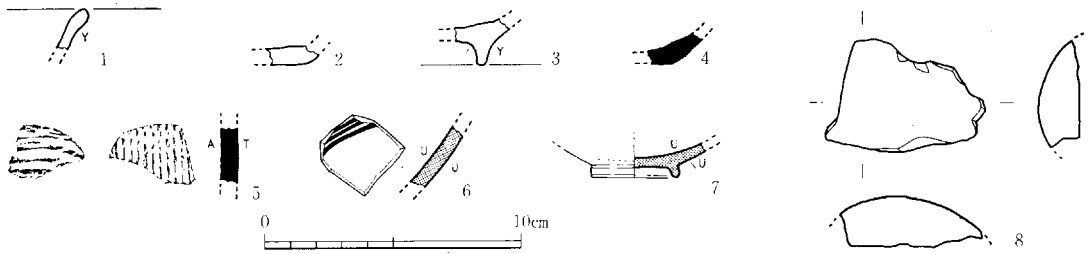


Fig. 58 A地点出土遺物実測図

Tab. 6 A地点出土遺物観察表

No	器種	法量 (cm)			色		胎土	焼成	備考
		①口径	②器高	③底径	①外面	②内面			
1	土師器 坏				灰白色 (2.5Y 8/2)		良好	良好	
2	土師器 坏				①灰白色 (2.5Y 8/2) ②淡赤橙色 (7.5Y 7/3)		やや不良	良好	
3	土師器 埴				①灰白色 (2.5Y 8/2) ②褐灰色 (10YR 6/1)		良好	良好	
4	須恵器 坏				灰白色 (10Y 8/1)		不良	やや不良	
5	須恵器				青灰色 (10BG 5/1)		精良	良好	
6	青磁 埴				素地-灰白色 (7.5Y 8/1) 釉調-やや濁った透明		不良	良好	内外面に貫入あり
7	磁器 埴	③	3.4		素地-浅黄橙色 (10YR 8/3) 釉調-灰白色 (5Y 7/1)で濁る				

ナドモリブデン酸比色法、全カルシウムは原子吸光光度法により定量した。

その結果、全リン酸は土壌内0.77mg/g、土壌外0.37mg/g、全カルシウムは土壌内1.16mg/g、土壌外0.90mg/gの分析値が得られた。試料数は少ないが、試料採取地の土壌は肥料による汚染がほとんどなく、土壌内外における両成分の分析値の開きは定量的に意味をもつものであり、土壌墓もしくは火葬墓の可能性を否定するものではないであろう。

出土遺物 (Fig. 58, PL.32(3))

1～3は土師器。1・2は坏。1は口縁端部がやや肥厚し外反する。2は底部で、外底面の凸凹からヘラ切りであろう。3は埴で断面長台形の高めの高台を貼付する。4・5は須恵器。4は坏で、底部と体部の境が不明瞭である。5は外面に平行タタキを施す中・大形品であろうが、器種は不明。6は青磁で、内面に片彫り文様を有する。内外に貫入がみられる。7は敲石もしくは磨石と思われるが、欠損が著しく詳細は不明。

[注]

1) 山口大学埋蔵文化財資料館「吉田構内大学会館新営に伴う発掘調査」(『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅲ』、1985年)。

### 5 農学部植栽に伴う立会調査

調査地区 吉田構内 N-17

調査期間 昭和63年3月17日

調査方法 工事施工時における立会調査

調査面積 約3m<sup>2</sup>

調査結果 工事は農学部の西側の庭園に樹木を移・植樹するものである。木数は4本で、径2mの範囲について、現地表面から80cmの掘削を必要とした。このうちの3本は、昭和47年に新営された同学部本館の建築工事や既設の汚・雨水管理設工事の際、すでに掘削され、攪乱を受けている部分に植栽されるため、調査の対象から除外した。調査の結果、現地表面から70cmまでマサ土が厚く客土されており、その下位には構内造成に伴う埋め土が堆積している。顕著な遺構、遺物包含層は認められなかったが、埋め土内には遺物包含層と思われる、木炭を含む黒褐色粘質土がブロック状に混在している。出土遺物はない。

同学部本館周辺では、中央図書館増築、中央ボイラー棟車止設置に伴う調査などが断片的に行われているにすぎず、遺構、遺物包含層の埋存状況はほとんどわかっていない。前者では、三層に分層される層厚約95cmの遺物包含層が検出されており、弥生時代前期から鎌倉時代の遺物が出土している。中央図書館付近は地山が北から南に下降しており、同学部本館の西端部付近から中央広場にかけての地域にも、遺物包含層が広がっている可能性があり、今後の調査が期待される。

[注]

- 1) 山口大学埋蔵文化財資料館「中央図書館増築予定地M-16区の発掘調査」(『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅱ』、1985年)。
- 2) 山口大学埋蔵文化財資料館「中央ボイラー棟車止設置に伴う立会調査」(『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅴ』、1986年)。

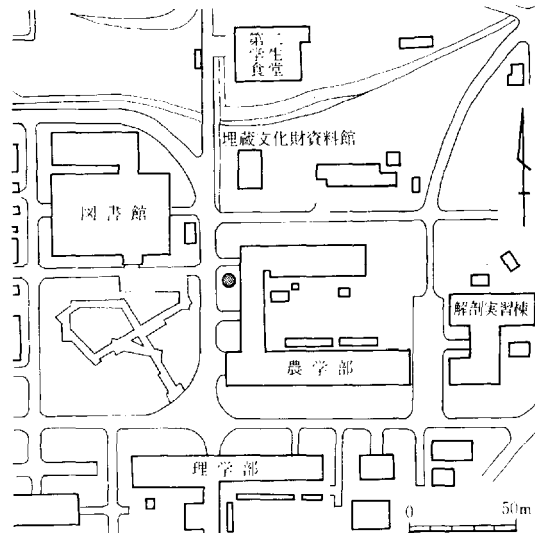


Fig. 59 調査区位置図

## 6 経済学部集水桝取設に伴う立会調査

調査地区 吉田構内 K-20

調査期間 昭和63年3月20日

調査方法 工事施工時における立会調査

調査面積 約0.5m<sup>2</sup>

調査結果 集水桝の取設は、第二講義室棟周辺の舗装、U字溝・排水管取設工事および樹木の植栽等を行う環境整備の一環として計画された。なお、集水桝を除く各工事は、掘削規模が現地表面から10～25cmと浅く、過去の調査結果から、埋蔵文化財に影響を及ぼす恐れがないことから、調査対象から除外した。取設地点は、昭和61年度に実施した同学部<sup>1)</sup>身体障害者用スロープ取設に伴う立会調査D地点の南約30mに位置し、掘削規模は現地表面から50cmである。現地表面はD地点より約40～50cm高いが、D地点では40cm下位で、黒褐色粘質土の埋土をもつ柱穴が検出されており、本工事によって遺構が検出される可能性が十分考えられた。

層順は、現地表面から35cm下位まではマサ土で、その下には構内造成に伴う埋め土が客土されている。地山は検出されなかったが、両地点の現地表面の比高差から、遺構面はさらにその下位に存在するものと推察される。なお、埋め土中には、旧耕作土、遺物包含層

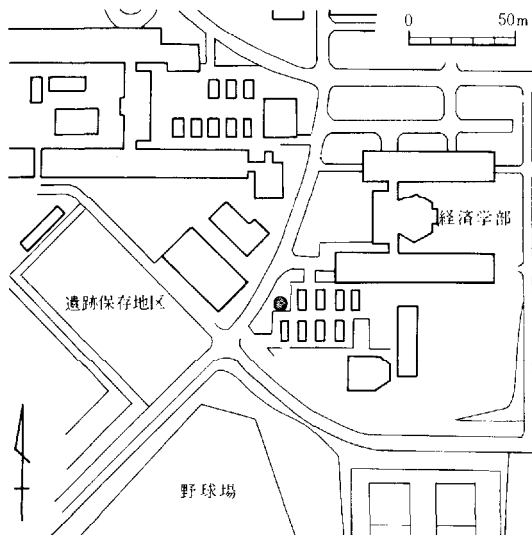


Fig. 60 調査区位置図

と思われる木炭を含む茶褐色粘質土、および地山を形成する黄褐色粘質土がブロック状に混在しており、周辺で地山に達する削平が行われたことを窺わせる。遺物は出土していない。

### 【注】

- 1) 山口大学埋蔵文化財資料館「経済学部身体障害者用スロープ取設に伴う立会調査」(『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅵ』、1987年)。



## 7 九田川改修に伴う立会調査

調査地区 吉田構内 B・C-17

調査期間 昭和62年10月20日

調査方法 工事施工時における立会調査

調査面積 約20m<sup>2</sup>

調査結果 九田川は吉田構内の北側を東から西に走行し、榎野川に合流する総延長距離約5.8kmの二級河川である。現在の河川は平均川幅7.1~4.9m、平均深さ1.4m、流水能力10.0m<sup>3</sup>/秒で、30年確率の洪水流量19.6m<sup>3</sup>/秒に比べてはるかに河積が小さく、改修が必要とされていた。改修はテニスコート西側端から下流約4.2kmはすでに完了しており、引き続き、吉田構内に沿う流路長750mの範囲について昭和62年度から5ヶ年計画で実施するものである。昭和62年度は、テニスコート西側端から上流約20mについて、吉田構内側の左岸は幅約1m、現地表面から約5mの掘削を必要とした。テニスコートの存在する地域では、過去に二回の調査を行っている。その結果、現地表面から約1~1.4m<sup>1)</sup>下位で、弥生時代から古墳時代にかけてのものと思われる遺物包含層が検出されており、今回の改修工事によって遺物包含層が掘削される恐れが十分に考えられた。

調査は山口県埋蔵文化財センターが主体となり、埋蔵文化財資料館は吉田構内の遺跡との比較・検討資料蓄積のため、調査補助として参加した。その結果、工事範囲内は護岸用の石垣の裏込めで顕著な遺構、遺物包含層は検出されなかった。しかし、63年度以降はさらに吉田構内側への掘削幅が広がる計画であり、工事に伴う埋蔵文化財への慎重な対応が必要であろう。

[注]

- 1) 山口大学埋蔵文化財資料館「学生部テニスコートフェンス改修に伴う立会・試掘調査」(山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅲ・ⅣⅠ、1985)。

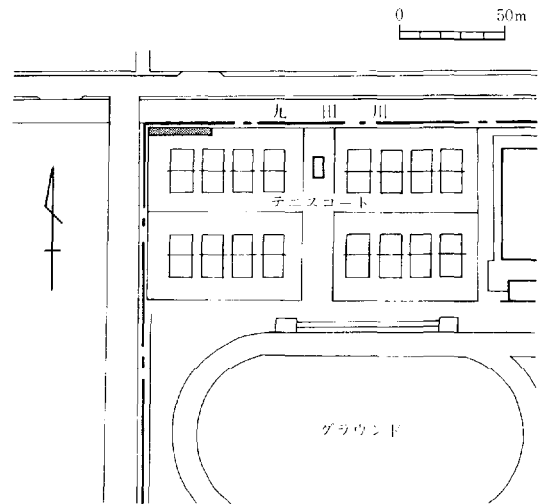


Fig. 61 調査区位置図

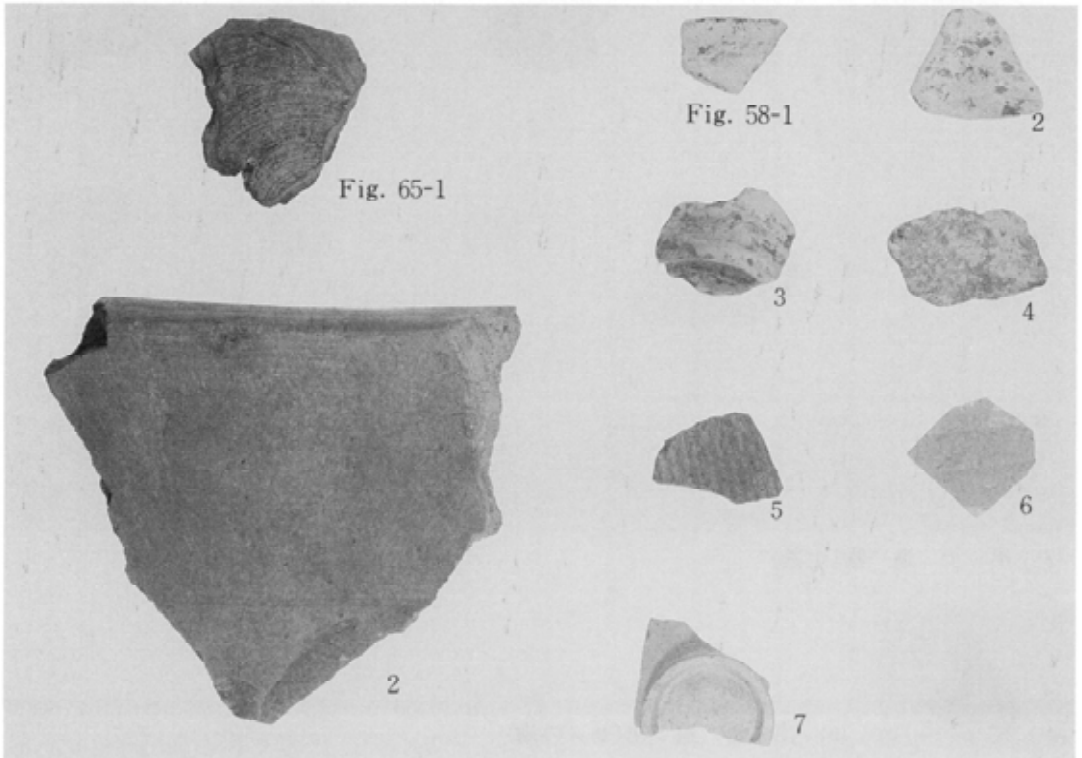
昭和62年度山口大学構内の立会調査



(1) 農学部附属農場E7圃場A地点土層断面  
(東から)



(2) 農学部附属農場E6圃場B地点土層断面  
(西から)



(3) 出土遺物